

2023年10月15日 説教「御霊が示すままに」

使徒の働き 16章 1～10節

バルナバと分かれたパウロはシラスを伴い、陸路をとってキリキヤに行きました。兄弟から送り出される時、彼らは「主の恵みにゆだねられて」出発しました。第二次伝道旅行が開始でした。



1. テモテを連れていくために (1節)

①ルステラのテモテ (1)「それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシャ人を父としていたが、」

パウロがバルナバと第一次伝道旅行で巡った最後の地、デルベに、パウロとシラスの一行は陸路で辿り着きました。そして隣の町であるルステラに行ったのですが、ここにはテモテという弟子がいました。テモテへの手紙のテモテです。彼のお母さんはユダヤ人でユニケでした。祖母はロイスといいますが、テモテの信仰は母と祖母から受け継がれたものでした(Ⅱテモテ 1:5)。お父さんはギリシャ人でしたから、信仰を持っていたかどうかはわかりません。

②評判の良い人 (2)「ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった。」

テモテはルステラ、イコニオムにある地域教会の兄弟たちの間で、評判が良い人でした。教会のためには忠実に働き、人々への愛があり、伝道においても積極的だったと思われます。

③割礼を受け (3)「パウロは、このテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシャ人であることを、みなが知っていたからである。」

そのようなテモテについて、パウロは最初の伝道旅行の時から注目していました。そして、これからの伝道旅行には、ぜひとも彼を同行させたかったのです。それにあたっては、母や祖母の信仰もあるので、彼に割礼を受けさせたのです。というのも、ルステラやイコニオムではテモテの父親がギリシャ人であることを誰も知っていたからです。そうすれば、ユダヤ人に相対する時にも都合が良かったからです。

2. 諸教会は強められ (4～6節)

①規定を守らせようと (4)「さて、彼らは町々を巡回して、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を守らせようと、人々にそれを伝えた。」

パウロとその一行は町々に巡回伝道するにあたっては、エルサレム会議で決められたことを行く先々で伝えました。つまり、異邦人の救いの確実さと、彼らには割礼などを施す必要がないといったことでした。

②人数を増していった (5)「こうして諸教会は、その信仰を強められ、日ごとに人数を増していった。」

一行の宣教は用いられ、諸教会のクリスチャンの信仰は強化されると共に、救われる人々が多く起こされていき、教会もそのメンバーが増えていきました。

③アジア伝道の禁止 (6)「それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。」

さて、パウロは、前回の伝道旅行でアジア地域に行っていませんでした。そこでその地での伝道をしたかったと思います。しかし、アジア伝道を聖霊によって禁ぜられたので、北の道を進んで、フルギヤ・ガラテヤ地域を通過して、西方へと進んで行ったのです。

3. 主の強いご意志 (7~10 節)

①御霊はお許しにならず (7)「こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」

ムシヤ地域まで来て、北東のビテニヤ地域に行こうとしたのですが、今回も御霊がその道へ行くことをお許しにならなかったというのです。表現上の注意をしておく、「イエスの御霊」とあることです。三位一体の神は、父なる神、子なる神(イエス・キリスト)、御霊なる神にしておひとりである方ですが、ここではイエスの御霊とあって、三位一体なる神がそのうちにおいて共同して働いておられるのだということがわかります。

②パウロは幻を見た (8~9)「それでムシヤを通過して、トロアスに下った。ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、『マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください』と懇願するのであった。」

「それでムシヤを通過して、トロアスに下った」とあるように、パウロ一行はエーゲ海に面した町トロアスに通ずる道を進んで行ったのです。彼らは主の導きがどこにあるのかが皆目わからなくなっていたかもしれません。トロアスに着いているのかは判然としませんが、ある夜のことパウロは夢を見たのです。それはエーゲ海を越えて向こう側にあるマケドニヤ人が、パウロの前に立っているのです。そして「マケドニヤに渡って来て、助けてください」と懇願するのでした。

③マケドニヤへの導きの確信 (10)「パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。」

パウロはこの幻が、主の導きであると確信しました。そしてマケドニヤ向かうことが、自分たちの進む道であり、その地の民に福音宣教をせよというのが主の御意志であると信じたのです。これは歴史的に見ても、大きな出来事です。つまり、エーゲ海を越えた向こうの地は今日で言うヨーロッパです。そして、キリスト教がヨーロッパに広く伝えられて行ったことを考えると、その一歩がここに刻まれようとしていたのです。

《結論》今朝の箇所を読みながら、「なぜ?」と思う点にぶつかった方がいるかもしれません。その点を、まず考えたいと思います。それは、テモテに使徒パウロは割礼を受けさせた、という点です。パウロはエルサレム会議で決議されたことを携えて宣教を始めました。つまり、異邦人がキリストの福音を信じた場合、彼らには割礼をさせたり、律法遵守を強要させたりしないことが原則でした。エルサレムに乗り込んで、会議で主張したのもパウロでした。それなのに、どうしてここでパウロはテモテに割礼を受けさせようとしたのでしょう。使徒の働きやパウロの数々の書簡を見ると、彼は原則を大切にす理論家です。人は恵みによる信仰によって救われるというのが、彼の確信でした。ですから、テモテが既に救いを与えられている人であることは微塵も疑っていませんでした。しかし、ルステラやイコニオム周辺のユダヤ人クリスチャンの強硬派達を説得するために、時間を使うべきではないと考えたのでしょう。それに、テモテの祖母も母もユダヤ人クリスチャンでしたから、この際に割礼を受けさせることには異存はなかったことでしょう。また、パウロはこれからの伝道において、ユダヤ人たちへ伝道をする時にも、割礼を受けた方が、テモテにとって便利であると踏んだのでしょう。いずれにせよ、パウロは宣教の視点から、柔軟にこのことに対処したのです。

もう一つのポイントは聖霊がパウロ一行の行く道を二度にわたって禁じられたという点です。主なる神は、パウロたちが行く道筋一つ一つに、ご意志を持っておられたということです。しかし、パウロの側でも、計画や願いがありません。主の御意志とパウロの意志が異なってしまったのです。そのような時に、主の御心に従順であるかどうかを、神は見ておられたのでしょう。アブラハムにとってイサクはようやくにして与えられた息子です。成長して将来が楽しみでした。しかし、主はそのイサクをささげよと言われました。モリヤの地で捧げようとしたときに、主はイサクをほふることを止められ、雄羊を用意してくださいました。アドナイ・イルエ、「主の山に備えあり」でした(創世記 22 章)。私達には主の御意志に従う信仰が求められているのです。ここで、パウロが従った結果に備えられたのは、マケドニヤに向かう道でした。パウロには理由がわかりませんでした。しかし、後になってみれば、それが重要な分岐点であったのです。主は、パウロに幻でマケドニヤ人を用いて、そちらに導いて下さいました。

私達の歩みにおいても、主の御心と自分の意向がぶつかることがあるでしょう。まず、私達は御心を知ることを求めましょう。それは御霊が示す道です。その道は狭いかもしれませんが、天来の平安と喜びがあります。それをどのようにして知るか。客観的な状況、霊的アドバイスなども道を示しています。願いにも働いてください。それでも、主の御心に気づき始めても、頑なに自分の意志を通そうとする心が働くかもしれません。また、感情がついていかないこともあります。静まって、主の御心に従う信仰を備えていただきましょう。御心に従う道にこそ主の祝福があるからです。